第 1.1 版 2022 年 5 月 16 日

『復古編』・『増修復古編』小篆字形対照表　解題

広島大学総合科学部　鈴木俊哉

本表は、北宋・張有『復古編』とその増補本である曹本『續復古編』について、小篆字形を切り出して対照表としたものである。續復古編が含む小篆 2139 項はすべて示すが、復古編にあって續復古編に採られていない小篆は略している。材料とした資料は以下の通りである。

A)　『説文解字』(南宋刊元修大徐本) 海源閣旧蔵 国学基本典籍叢刊影印

B)　『説文解字五音韻譜』(南宋刊本) 中国書店影印

C)　『復古編』 黄丕烈旧蔵影宋写本 四部叢刊三編所収

D)　『復古編』 元・好古齋刊本 中華再造善本所収

E)　『續復古編』 明・趙宧光旧蔵写本 北京図書館珍本叢刊所収

F)　『續復古編』 清・咫進齋翻刻本 續修四庫全書所収

1.　凡例

		海	宋五	復宋	復元	續明	續清	
Xu-FGB-0001	海:巻07下.03b.g17 續明:巻1.01a.g01							船
Xu-FGB-0002	海:巻03上.07b.g08 續明:巻1.01a.g02							童
Xu-FGB-0003	海:巻05上.02b.g15 復宋:巻01.001b.g01 續明:巻1.01a.g03							筩/FGB-0002

表の各欄は左から以下の内容を示す。

①　項番

Xu-FGB-dddd の形式で續復古編の掲出順に示す(Xu-FGB-0001～2138)。順序は續修四庫全書影印の咫進齋本に依ったが、趙宧光旧蔵本は 1 字空格となっている部分があるが(Xu-FGB-1491、「泮」。ただし説解は残っている)、順序の違いは無い。

②掲出箇所

大徐本説文解字(海)、影宋写本復古編(復宋)、趙宧光旧蔵本續復古編(續明)の掲出位置を示す。咫進齋翻刻本の行款は趙宧光旧蔵本に同じである。掲出箇所は趙宧光旧蔵本、巻 1・葉 2 右・頁内見出し番号 3 であれば、巻 01.002a.g03 のように示す。葉の中での頁の右・左を a(右)、b(左)で示す。見開き装丁の場合には右側が b、左側が a になることに注意されたい。

續復古編は巻 1 が上平声・下平声、巻 2 が上声・去声、巻 3 が入声と附録(聯緜、形聲相

類、形相類)、巻 4 が附録(聲相類、字同音異な、筆迹小異、上正下譌、音同字異)のように分かれている。

③海

国学基本典籍叢刊の南宋刊元修説文解字(海源閣本)の小篆字形。

④宋五

中国書店影印の南宋刊説文解字五音韻譜の小篆字形。

⑤復宋

四部叢刊三編影印の復古編(黄丕烈旧蔵影宋写本)の小篆字形。

⑥復元

中華再造善本影印の復古編(好古齋元刊本)の小篆字形。

⑦續明

趙宧光旧蔵本(北京図書館珍本叢刊影印)の小篆字形。

⑧續清

咫進齋翻刻本(續修四庫全書影印)の小篆字形

⑧対応 UCS 漢字、および復古編項番

小篆を指示可能な UCS 漢字の主なものを示す。日本の常用漢字対応のため新字体も含む。また、字形が似ているが字源・字義が異なるものも含む。

2. 續復古編について

2.1. 先行研究

續復古編の版本に関しては朱生玉・胡惠 2020 がよく整理されている。咫進齋本は清代の 3 種の写本(陸心源旧蔵影元写本、阮元写本、葉鞠裳写本)を校合して作られたが、これらの写本は趙宧光旧蔵写本を祖とするものではない。ただし、この論文では陸心源旧蔵影元写本そのものは確認していないように思われる。また、本編に関しては尹雙 2008、趙瑩 2021 の研究があり、趙瑩 2021 は陳昌治本説文解字(いわゆる一篆一行本)との対照表も持つが、両研究ともその主眼は小篆字形よりは説解に見える「俗字」を対象としたものである。

2.2. 版本について

續復古編には多数の序が寄せられているが、趙靈均旧蔵本でも陸心源旧蔵本でも基本的には同じ序文であり(各氏の序文の収録順序は異なる)、全て至正年間であることから元刊本があったと考えられている。元刊本そのものは伝わらないが、陸心源旧蔵写本が影元写本と呼ばれてきた。しかし、王珏 2020 が指摘するように序文に見える項目数と現行本の見出し項目数には齟齬があること [1]、また後述する盧熊の増補の状況から「元刊本」から直接写したものと考えてよいかには疑問がある。上述のように趙宧光旧蔵本と陸心源旧蔵本を比較すると本編において趙宧光旧蔵本は見出し小篆が 1 項欠けて空格となっている。し

[1] 魏郡曹による序文では附録を含めて 6049 項と言うが、現行本では本編 2139 項(うち 321 項は盧熊による増補)と附録 3452 項で合計 5270 項しかない。

かし附録においては、陸心源旧蔵本で反切が空格となっている部分が趙宧光部分では欠けていないという状況もある(形相類の「鐫」字)。以上より、この 2 本は共通の祖本があるものの、分岐した系列にあったと考えられる。

3. 復古編との関係

復古編との重なりも多く、著者として張有の名前も示す呉均『增修復古編』と比較すると、復古編との重なりが少ない續復古編は、単体ではなく復古編との併用を想定したもののように思われる。従って、想定していた復古編がどのようなものであったかが興味の対象となる。

續復古編に寄せられた序文のうち魏郡曹の序文によれば、續復古編の撰述は至順 3 年(1332)に始まり、至正 12 年(1352)に成ったとある。従って、撰述中に元・好古齋本による復古編の翻刻本(1346)が出版されたことになる。しかし續復古編と復古編の重なりは少なく、元刊本にしか見えない「坫」字も含まれないため、文字集合からの判断はできない。

復古編の影宋写本・元刊本、また大徐本の 3 者の小篆字形差が目立つ図形部品として「金」「長」「魚」「斗」などがあるが、續復古編はこれらの図形部品が復古編の 3 点のうちどれかに揃っているわけではなく、小篆字形については独自の規範を持っていた可能性がある。

3.1. 曹本自身の増補について

魏郡曹が寄せた序文には「……及説文注敘所載而諸部不見者經典所有而説文不録者審知漏落悉从補録而附益録……」、また克新仲銘が寄せた序文には「……惟許慎説文十五篇僅存為世遵信然其中間有遺脱如劉免之類……」などとあり、經典に見える説文未収字を加えたことが評価されている。ただし、雷浚『説文外編』において經典から収集した説文未収字が 900 項を越えるのに対し、本編で確認できる大徐本未収字は 20 項に満たないことから、新規の調査結果ではなく、収集したのでは無く、何らかの先行研究から持ち込んだ可能性がある。

また、續復古編も大半は説文所収字ということになるが、復古編と續復古編を合わせたときに全ての説文所収字を含むものではない。上述の説文未収字の追加について考えると經典で用いられるものを優先するようにも思える。たとえば最初に示される「躳」は經典で実際には殆ど使われず、実際に經典で多用されるのは説文が「躳」の或体[2]として説明する「躬」である。従って、經典に見える文字を説文学あるいは六書学によって改めた上で掲出している可能性がある。

3.2. 盧熊による増補について

續復古編の上平声・下平声・上声・去声部の末には「逢字起至蠻字共七十六字盧熊字公武所增」のように盧熊(慮公武)が増補したことが書かれている(具体的には上平声の Xu-FGB-0328～0402, 下平声の Xu-FGB-0770～0882, 上声の Xu-FGB-1200～1275, 去声の Xu-FGB-1633～1689)。これらの見出し字について廣韻および集韻での掲出位置を調べると、増補し

[2] 小徐本では「躬」を「躳」の俗字としている。續復古編でも「躬」を俗とする。

た文字の前後では韻書配列が逆行している様子が見える。しかし、入声部に対しては盧熊が増補したという文言が無く、また順序の逆行も見えないので、増補を受けていないと考えられる。これに関する序文が無いことと考え合わせると、この盧熊の増補は未完であったと思われる。現存の写本の全てに同じ盧熊の増補が見えるため、この増補作業中の稿本[3]が現存の写本の祖本であった可能性がある。

謝辞

本表は科研費課題番号 19K12716 の成果です。訪問による文献調査が困難な社会情勢下にあり、広島大学図書館の方々に多大なる御助力を頂きました。

参考文献

許慎: 『説文解字』, 北京國家圖書館所蔵南宋元修本影印, 國學基本典籍叢刊, 國家圖書館出版社, 2017, ISBN 9787501360253

李燾: 『宋板重刊説文解字五音韻譜』, 中國書店, 2012, ISBN 9787514904192

張有: 『復古編』, 黄丕烈旧蔵影宋写本, 四部叢刊三編

張有: 『復古編』, 北京國家圖書館所蔵好古齋元刊本, 中華再造善本, 北京圖書館出版社, 2004, ISBN 7501325472

曹本: 『續復古編』, 北京國家圖書館所蔵 趙宧光旧蔵本, 善本書號 7332, 北京圖書館古籍珍本叢刊 5 巻, ISBN 7501307032

曹本: 『續復古編』, 續修四庫全書, 第 237 冊 經部小學類, ISBN 7532524604

尹雙: 『《續復古編》研究』, 浙江大学人文學院碩士論文, 2008

王珏: 『北宋張有《復古編》研究』, 中國社會科學出版社, 2020, ISBN 9787520372626

朱生玉、胡惠: 「曹本《續復古編》概説」, 寧波大学学報(人文科学版), 2020-03-10, Vol. 33, No. 2, p.94-99.

趙瑩: 『《續復古編》字形研究』, 西北大學碩士論文, 2021

変更履歴

1.0 (2022/05/11)　対照表のみ公開。

1.1 (2022/05/16)　本解題を追加。

---

[3] 盧熊が全体の写本を作りながら増補したのではなく、元刊本に直接増補内容を書き込んでいたことは考えられるが、同一葉に曹本の原文と盧熊の増補分が隙間なく書かれているところからすると、現行本はその稿本の精緻な模写ではなく、一度行款を整理した後の姿と思われる。